
手紙

amanojyaku

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙

【Nコード】

N6124C

【作者名】

amanojyaku

【あらすじ】

友達に初恋のような感情を抱く主人公、私。

過去の記憶

今だったら、あの時の気持ちを素直に伝えられるかもしれない。最初から分かっていたのだから、だから伝えてもいいのだと、私は今、思う。

ねえユウリ、私は素直じゃないから、いつも自分の気持ちと正反対のこと言ったりやったりしちゃうんだ。ユウリはそんな私の性格も全てお見通しだったよね。

ユウリにとってあたしは何なんだろうってよく考えてた。きっとただの友達だよ。当たり前だよ。でもさ、私は違うんだよね。

ユウリはもちろん友達だよ。だけど、それを超えた特別な存在ってことも知ってほしいんだ。

好きっていう感情を通り越したら何になるんだろうね。

私はユウリのこと誰よりも大切にしたいし、好きでいたい。ユウリのためだったら、どんな犠牲にでもなれると思う。

けど、ユウリに私と同じ気持ちを求めてはいけないと思うんだ。分かってるよ。それほど恐いことはないもんね。

でもやっぱり私はユウリの特別でありたかったんだよね。ユウリの全てが私だけのためにあってほしかった。そんなこと言ったら、ユウリはなんて言うかな。

ユウリは会うといつもギョってしてくれた。

私はその度とろけそうなほど幸せを感じてしまうよ。

そんな思いを素直に伝えられたら、ユウリは遠くへ行ってしまうなかつたかな。

いわゆる一目惚れ

私がユウリと出会ったのは高一の頃だった。
まだ幼い私は恐いものばかりだったけど、
ユウリはいつも孤高を持っていたよね。

出会った瞬間、私たちはお互いの中に存在する光と闇を感じ取ったのだろう。

ユウリも私も、きっとそうだ。だから、私たちは出会ったんだよね。

私はいわゆる一目惚れというものをしたのだと思う。
女しかない空間をなかなか受け入れることが出来なかった私の中に、

ユウリだけがずるりと入ってきた。
凜とした眼差しが芯の強さを感じさせた。

透き通るような茶色い目。

色素の薄い柔らかそうな短い髪の毛。

雪のように白い肌。

折れてしまいそうなほど細い体。

これほど女性的な美しさを持っていながら、ユウリは男の子にしか見えなかった。

とても美しい男の子。まるで赤ちゃんみたいな愛らしさ。

そのどれもが私を幸せで満たしてくれた。

「おはよう」

「・・・」

あれ、シカト・・・？

始めて声をかけた時、ユウリは物凄い勢いでこちらを睨みながらシ

カトした。

私はそれ以来、毎日「おはよう」を言い続けた。

「おはよう」

「・・・」

今日もダメか・・・。

「・・・おはよ」

あれ？今なんて？

確かに。

かすれたような声で、ユウリは返事をしてくれた。

少しふてくされたような顔をしながら、私の前をすうっと通り過ぎた。

そんなユウリの一挙一動が私の心を容赦なくかき乱す。ガンガン乱す。

ユウリの周りには、いつもメンソールの香りだけが悲しく広がっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6124c/>

手紙

2010年10月21日21時14分発行